新規購入主要文献解題

『スポーツの系譜』G　三星宗雄

1. (1) 明治期学校体育の研究 ― 学校体操の確立過程 ―
   (2) 能勢修一
   (3) 不味堂出版
   (4) 1995
   (5)　我が国に欧米から多くの近代スポーツが入って来た明治初期は，我が国におけるスポーツ史および文化史の上で大変興味深い時代である。ところで明治政府は学制（明5）によって，教育の一環として小学校の教科に体術（体操）を設置し，学校体操（体育）を強く押し進めた。本書はこの体操科が明治期にどのような歴史的展開をたどって近代学校体操として確立したか，を入念な文献探索を通して明らかにしようとしたものである。

   著者は明治11年に文部省が開設した体操の専門教師の養成所である「体操伝習所」の果たした役割を高く評価する。欧米から移入されたスポーツ・遊技が同所において初めてなされた訳ではないが，同所の卒業生によって全国に普及されたとする仮説は大変興味深い。またスポーツ・遊技と「体育」の接点である運動会も体操伝習所において初めて開催された（坪井玄道はそう主張する）とは断定できないが，そこを通して全国に広まったいったとする記述は明治期におけるスポーツ／体育文化の受容過程を考える上で参考になろう。
2. (1) 図説スポーツの歴史 ―「世界スポーツ史」へのアプローチ ―
   (2) 稲垣正浩他
   (3) 大修館書店
   (4) 1996
   (5)　豊富なカラーの絵と写真が盛り込まれたスポーツの図解歴史書である。絵と写真を眺めているだけでも結構楽しめる。序章「スポーツの編年史」，第1章「大航海時代とそれ以降の民族スポーツ」，第2章「近代スポーツの系譜」，第3章「スポーツの現在」，終章「スポーツ文化の問題情況」という内容。

   スポーツ史であるから当然時間軸に沿って話が進められるが，紀元前2000年以上前のエジプトから始まる古代スポーツの紹介もさることながら，それらと現在世界各地で見られる民族スポーツとの比較が読者の好奇心をそそる。

   一方副題からも分かるように，本書は「スポーツの世界史」を掲げている。単なる欧米中心のスポーツ史ではなく，世界各地起源の民族スポーツに多くのページが割かれていて，目を見開かされる。例えば，我が国の国技である相撲に関しても，モンゴル相撲ばかりでなく，韓国のシルム，中国・イ族，バハウ・ダヤク族（ボルネオ島）の相撲，西アフリカ・ヌバ族，バチャマ族の相撲，グリーンランド・エスキモーやハワイの「座り相撲」もある。アマゾン・カマユラ族の女相撲もあり，驚きである。

   近代スポーツの系譜も「種目」別になっていて大いに参考になる。また終章にある「競争原理を超克するスポーツの可能性」というテーマは未来のスポーツを考える上で避けて通れないテーマ。
3. (1) 球技用語事典

(2) 櫻井榮七郎（編）
(3) 不味堂出版
(4) 1998
(5)　ここで扱われている球技は我が国で比較的良く知られている主な25種目であるが，同じ類型と考えられる種目も入れると260種目に及ぶ。それらの歴史，方法，競技会等について収録。最後に詳細な球技史年表と厖大な球技関係参考図書が付いている（全1037ページ）。ちなみに「野球」の項目を見ると，「ベースボールの日本名」とある（もちろんその後に詳細な解説がついています）。

（三星宗雄）

『近代日本のアジア教育認識・資料編　台湾の部』
近代アジア教育史研究会編　龍渓書舎　2004年2月刊

この資料集は，既刊の第Ⅰ部韓国の部全9巻，第Ⅱ部中国の部全22巻に続く第Ⅲ部全15巻として公刊された。内容は，明治後半，19世紀末から20世紀初頭にかけての日本の各種教育雑誌，および一般雑誌や各種団体機関誌，女性雑誌等に収録されている台湾の教育文化に関する記事や論説を抽出，整理したものである。

この本の「はしがき」によると，日本で当時出版された各種雑誌には「従来中国や韓国，あるいは欧米の雑誌・文献類からだけでは十分明らかでなかったアジア各国，地域の具体的な教育状況を示す貴重な資料が数多く含まれている。同時に我々はまた，これらの記事や論説類をとおして，明治日本のアジア諸国の教育に対する蔑視＝停滞史観や，それと対応する形で，アジア教育の停滞打開の方途は「先進」日本の指導の下での革新以外にないとする優越意識，さらにはアジア諸国の教育に対する日本の積極的関与や教育主権収奪の構想が，漸次形成されていく経緯を窺うこともできるのである。」

そして，以上のような問題関心からこれに関連する資料を可能な限り収得したとする。

明治日本のアジア教育認識に関する基礎資料が全3部で完成した今，これらを活用したさまざまな関心からの研究が待たれているのである。

（大里浩秋）